

# 百喩経

岡本かの子

青空文庫



## 前言

この作は旧作である。仏教は文芸に遠い全々道德的一遍のものであるかという人に答えるつもりで書いたものである。だが繰り返して云う、この作はやや旧作に属するものである。で、文章の表現が、いくらか前時代のものであると感ぜらるるならば、了<sup>りようじ</sup>恕<sup>よ</sup>して頂き度<sup>た</sup>い。ただ、仏教なる真理を時代に応じてクリエイションして行く者は芸術家と同じ直覚力を持たねばならぬということ、否たとえこの私の作は拙悪であるとしても仏教と文芸はむしろ一如相即のものであるという事を会得<sup>えとく</sup>して頂くならば私の

至幸とするところである。

尚、なお ひやくゆきよう百喻經は、仏典の比喻經のなかの愚人（仏教語のいわゆる決けつじようしよう定性たうと）の喩たとえばかりを集めた条項からその中の幾千を摘出したものである。但し經本には本篇の小標題とその下の僅々二三行の解説のみより点載しては無い。本文は全部其そこ処からヒントを得た作者の創作である。

### 愚人食塩喩

塩で味をつけたうまい料理をよそで御馳走になった愚人がうちへ帰って塩ばかりなめて見たらまずかった。

なんにも味の無い男だった。逢うとすぐ帽子を脱とつてお辞儀をするような男だった。おまけにおとなしく鼻もかむ。

「すこし塩をつけて喰べてみたらどう」

せつこう

石膏屋のおかみさんが齒しだこ朶子に教えて呉れた。おかみさんは齒朶子に払う助手料を差引く代りに石膏置場の小屋を少し綺麗に掃除して呉れた。

「そうねえ。すこし塩をつけて喰べてみましょう」

齒朶子が返事した。

小屋の真中の勇ましい希臘ギリシヤの彫刻に手鞆を預けて齒朶子と男の逢あいびいび——いきなり齒朶子は男の頬をびしやりと叩いた。そして黙ってすまして居た。

「ひどい。なんの理由もなしに……」

性急にどもり乍ら<sup>なが</sup>男の声は醜酔した。

「あんたがあんまりおとなしいものだからよ。口説いたのよ。こ

このうちの青熊が」

「青熊というのはこここのうちの主人ですね。よろしい」

男の略図のような単純な五臓六腑が生れてはじめて食物を送る為以外に蠕動<sup>ぜんどう</sup>するのが菌朶子に見えた。男は慄<sup>ふる</sup>える唇を前歯の裏でおさえていった。

「僕はここにある石膏をみんな壊してやる。それからあなたの職業を外の家いきつと探して来る」

その次におかみさんに逢ったとき菌朶子はいった。

「ありがとう。塩はほんとうに利いてよ。あの人に情が出てよ」

おかみさんは前に自分の云ったことを忘れて居た。そして齒朶子からはなしの全部を聞いて驚いて仕舞った。

「あたしや、でたらめに塩をつけたらと云ったのに、あんたはほんとうに塩をつけて喰べたのね。なるほど男に塩をつけるってそうするものなのね」

その晩おかみさんは亭主に云った。

「へんなことがあるんだよ。おまえさん。齒朶子の情人があたしのようなものを口説くんだよ。本気でだよ」

安ウイスキーを嘗<sup>な</sup>めて居た亭主は全身に興味の鱗<sup>うろこ</sup>を逆立てた。

「そいつあ、面白えな。色魔だな。うまく煽<sup>おだ</sup>てて石膏の一つも売

りつけてやれ。売りつけねえと承知しねえぞ」

その翌朝いやいや亭主に連れられて売付ける石膏を極きめに物置へ行ったかみさんは、勇ましい希臘の武將の石膏像の一つが壊されて居るのを発見した——ごく臆病に肩の先だけちよつと。

### 愚人集牛乳喻

愚人は客が来るまで日々の牛乳を搾しぼらないで女牛の体内にためて置くつもりだった。いよいよ客が来た時愚人は女牛の乳をしぼったがやはり一日分しか出なかった。

夫の愛は日に日に新鮮だった。血の氣を増す苜うまご蓿やしの匂いが



した。肌目きめのつんだネルのつやをして居た。甘さは物足りないところころで控えた。

それで保志子は夫の愛を牛乳に感じて宜よかった。

新婚後十月目。

めずらしく三つ押し並んだ休日があった。東京の実家の妹達が泊りがけで遊びに来ると知らせてよこした。そのしらせ通りの日になるまでにはあと六つ黄ろい秋の日が間に並んで挟まって居た。夫の自分への愛を保志子は妹達にも見知らせて置き度かった。飲んで内壁から吸収する幸福を気付かせて置くことは嫁入前の妹達に結婚衛生学の助講にもなる。

だが若い妹達に、まだ男の愛を肌地きじのよしあしで品さだめしな

い娘たちに、はたしてじぶんの夫の愛情のようなものが判るかしろん。牛乳の味が判るかしろん。いまだに彼女等がハリウッドヘスターのサインを貰う為めに手紙を鷺<sup>が</sup>ペンでなぞりなぞり書いてるような娘たちであつたらこりやむずかしい。こりや、肌地より分量で示すよりほかあるまい。

保志子は夫に頼んだ。

「これから向う五日間よ。なるたけ愛を節約してね。けれど妹たちが来たらその溜めといた分を思う存分あたしの上に使つてね。使つて見せてね」

髪の毛の薄い夫はよしよしといった。

樟<sup>しょうのう</sup>脳とナフタリンの匂いのするスカートと花模様の袂<sup>たもと</sup>がご

ちやごちやに玄関で賑わつて六日目の朝、妹たちが到着した。

「あたしが一番よ」

「あたしが一番よ」

二番目の妹と三番目の妹とは息をはあはあ云わせ乍らこんなことを争つて居る。停車場から馳けつこをして来たのだ。

相変らずこんな娘達だ。その用意しといて宜かつた、と保志子は思った。

「早くお上んなさいな。ざつとお湯を使って直ぐ御飯よ」

その間にも保志子は夫が五日溜めた愛情の今こそ肩に胸に一度に降り注がれるのを待つて身構えた。

「この柿、たいへん、おいしい。半分やろうか」

夫の愛の分量は、やっぱり一日分だけのものしか出なかつた。保志子が望むほど濃くも多くもなつて居なかつた。それよりも妹たちは、初めて来た姉の家の茶の間や庭先を見廻すのに氣をとられて居た。それに飽きると今度は姉の夫をすぐバツト細工の友達にして仕舞つた。

「牛乳は牝牛の腹には——と保志子は考えた——溜めて置かれな  
いものね」

### 三重楼喩

愚な富豪が木匠を呼んで三重楼を建て度いが、自分は三重

楼の下の二層は要らない、上一層だけが欲しいと云った。

「あの土台も作らず、あの胴も作らず、あのほっそりした塔の頂上だけをあの高さに於て作りおいたいものだと考えて見なさい」

セーヌ河の中の島でむく犬のリックとラックに向うから遊で飽かれて仕舞った老人で食扶持くいぶちの年金は独逸ドイツの償金で支払われて居るのがエツフェル塔を指してこういつた。

「そうすると、その不可能を可能にしようとする苦しみの間から人間の情緒が汗のように出るね。勇氣、失望、狡猾こうかつ、落胆、負け惜しみ、慰め——その間には叩かれた女の掌のやきもち筋も見えるよ。どこかへ生み落したはずと思う子供の片えくぼも出るよ。うっかり余分にやって黙って取られて仕舞った稿銭のたかも思い

出すよ。だが、結局、そんなものも焼きつくしてしまつてときどき花火のようなものが光るね。鏡を陽に当てて焦点を眼玉のなかへ射込ませる。あんなやわなものじゃないよ。眩まぶしいのが口のなかまで押込んで来て息が出来なくなるんだよ。おまえさんその時、きつとあつというね。おまえさん思わず頭を手でうしろから押えなさるかも知れんよ。頭のなかで働かしすぎた智恵の調革ベルトが引切れたとでも思いなさつてよ。だが、そんなものじゃ無いよ、それは。こつちでも向うでもないんだよ。ちよつと耳をそばへ持つて来なさい。小さい声で談はなすよ。あれはね猶太人のアインスタインユダヤが飯の種にしているあの「空間」というものだね、その証拠にはあの火花に頭を持って行かれるときエツフェル塔の頂上だけ土台

も胴なかもなくふんわりあの高さに浮ばせる無理が不思議でなく顕現するんだよ。は は は は は は は は は は。おれが思うのには聖オウガスチンという男はあわてものさ。あの火花を見ただけで神様の体まで見てしまったものと早合点したのさ。あれは神様じや無いよ。あれは神様の後光だけなんだよ。神様の体なんていものは伊太利イタリーの生章魚いきだこのようにその居場所によつてその居場所と同じようになつちまうんだから到底見えやしないよ。

そうかい、おまえさん、橋を渡つて河岸かしを歩いて帰りなさるか。今日は天氣が宜いから曳舟ひきぶねから岸壁の環へ洗濯紐ひもを一ぱい張つてあるから歩き憎にくいよ。は は は は。あすこの釣好きの馬鹿を見なさい。釣つた魚を、ポケットへ蔵い込んで大事にボタンを

締めたよ」

乗船失盂喩

或愚男あるが海に盂を落した。男は直ちに落した箇所の水流の具合など描き取つて置いた。二ヶ月して他国で前に描いて置いた水の具合いに似た海に來た。男は盂を得ようとして其処そこを探して得なかつた。

浪華なになわの堀を出て淡路の洲本すもとの沖を越すころは海は凧ないで居た。

帆は胸を落ち込ました。乗込客は酒筒など取り出した。女に口三味線を弾かせて膝の丸みを撫で乍らうとうとする年寄りもあつた。



陸は近かった。松並木は一重青く浮き出して居た。その幹の間から並んで動いて行く小さい苦屋とまやが見えた。あたたかな砂浜には人が多ぜいかなごを漁とる網を曳いて居た。犬が吠え廻った。

船舷ふなべりに頬杖を突いて一眠りした蔭蔵しげは痺しびれたような疲れもすつかり癒なほった。やる瀬ない気持ちだけが残った。

「そうだ簪かんざしがあつたのだ、おもかけをしのぼう」

よじれて来る浪なみがしら頭あたまを一すくい掌てのひらに掬すくい取つて口にふくみ顔を撫でて新らしい三尺手拭でふいた彼は、眼の前の春の海原のなかに木屋町の白けたきぬぎぬを思い出した。あけ方の廊下は冷たかった。鉛の板のような草履ぞうりだった。女は湯も取つては呉れなかつた。ただ傍に立っていて欠伸あくびをした。女の横顔をせめて別れに

しみじみ見て置こうとしたら向うを向いて仕舞った。

「薄情者奴が横顔さえも惜んだのか。向うむくはずみにわたしの袖の上へ落ちたのがこの簪なのだが、女は気がつかなかった。わたしはそのまま袖のなかへすべり込ませた。安っぽい銀簪。なんだ菊が彫つてある。小癩にも籬が彫つてある。汚い油垢が溜つて居る。それで居て、これを見ると恋しいのはどういうわけだ。ままよ嗅いでみてやれ」

捻くる拍子に簪を海へ落してしまった。蒔蔵はその時たいして惜しいとも思わなかった。まわりの景色だけに何故かよく気がついた。

「こういうところで女の簪を落したのだな。よし、よく覚えとい

てやれ」

船は港の泊りを重ねて尾州蒲がまごおり郡へいかり錨を下した。蒔蔵の故郷豊橋へはもう近い。

しかし、彼が木屋町の女に対する恋情は募るばかりだった。それより淡路の海へ落した銀の簪が惜しくてならなくなった。彼が着て居る着物とかえりの旅費ばかりになり、そのほかのあらゆるものを賭けての上かみがた方かた行きの代償は、たったあの銀の簪一本になったのだ。彼をそうさした女のたった一つの形見だったのだ。持つて居て一生恨み辛つらみを云わねばならぬ。彼の胸は煮えつくして却つてぼかんとして仕舞った。

浜に網曳く声が聞えた。犬の声も交つて居る。青松白砂。蒔蔵

は

「ここは淡路じや無いぞ。蒲郡だぞ」

と何遍自分に云つて聞かせてもどうしてもここが淡路に見えた。記憶のなかの洲本が消えて仕舞つて眼の前に洲本の海がぎらぎらする光と生々しきをもつて彼の感覚に迫つた。

「簪を返して貰おう」

畳の目のような小皺こじわを寄らせてねとりねとり透明な肌に媚びを見せて居る海の水を見詰めながら蒔蔵は帯を締め直した。それか  
らずぶと海のなかへ這はい入った。簪を得る代りに蒔蔵は海へ命を落  
した。

## 五人買婢共使喩

五人の男が公平に金を出し合つて一婢を雇つた。一人の男が怒つて婢に十鞭を与えると他の四人も権利を主張して婢に十鞭ずつを与えた。

五人で一人の女を雇つた。山査子さんざしの咲く古い借家に。

五人は生活費を分担して居た。従つて女の給金も頭分けにして払つた。それと関係なしに山査子の花は梅の形に咲く。

平凡な雇女は呼びようもなくして雇主の五人を一々旦那様と呼んだ。でもその呼びかたに多少のキャラクター特性を認めないこともない。

一人には、あの旦那様。

一人には、ちよつと旦那様。

一人には、恐れ入りますが旦那様。

一人には、いらつしやいますか旦那様。

一人には、ただ旦那様。

と呼んだ。

主人の一人は洗濯物を女に出す。すると他の四人の主人も洗濯物を出す。機会均等。利権等分。彼等には独身もののサラリーマンらしい可憐な経済観念があつた。

洗濯ものは五つ一様にきれいには洗えなかつた。かけて干したシャツの袖に山査子の赤黄ろい実の色がこすりついたまま畳まれるようなこともあつた。これを見つけた持主の主人は口を尖らし

て女を叱った。

すると他の四人も損をしまいと口を尖らして女を叱った。

叱られた女は、ここに於て主人を恨むべく――

「だが五人を恨むことは――」

と女は思った。

「わたしらのような女には五人も一度に人を恨むことは出来ない。そういうように心が出来て居ない。やっぱり仇かたきを一人にして恨み突き詰めて行かなければ……で、恨むのは、どの旦那様にしよう」

思い迷った女は八つ口から赤い手を出したまま裏口に立った。

そこに指で押しながら考えをまとめるに都合よくさいわい山査

子には小さい刺とげがあつた。

田夫思王女喻

田夫が貴姫を恋するところを人に打ち明けた。人は「王女に汝なんじの思いを通じたが汝を王女は嫌い」と告げたにも拘らず田夫は強しいても王女に自分を認めさせようとした。

「世に美しいものとはこの姫のことか」

陀堀多は畑の中から輿こしの姫を眺めた。彼は今、黒黍くろきびを刈つていた。



金銀の瓔珞ようらく、七宝の胸かい、けしの花のような軽い輿。輿を乗せた小さい白象は虹でかがられた毛毬けまりのように輝いて居た。輿は象の歩るく度たびにうつらうつらと揺れた。

陀堀多は知らず知らず黍の蔭に身を隠しながら姫の姿を追った。本あぜ道は榕ガジュマル樹の林へ向つていた。そこまではまだ二三町あつた。さいわい黍畑は続いて居た。はるかに瑠璃色るりの空を刻み取つて雪山の雪が王城の二つ櫓やぐらを門齒にして夕栄えに燦きらめいて居た。夢のような行列はこれ等の遠景を遊び相手にたゆたいつつ行く。

「あの姫にこのおれを認めさせずに行かせるのは残念だ。姫は二度とこういう田舎いなかへは来ないだろう。野の土くれの存在をああい

う虹にうつしとめて置くということは——何だか分らないが、一生の生いきが斐がいになるように思える」

黒黍の蔭を匍はつてついて行つた陀堀多は、そこで身を伸び上り声を叫ぼうとした。しかし腰は臆して伸びなかつた。もう行列の先手は二人ずつ並んで榕樹の林の紫の影に染まつて行く。

肥溜こえだめ桶があつた。鼬いたちの死骸りんが燐りんの色ただに爛ただれて泡かぶを冠かぶつていた。桶ひしゃく杓うが膿うんだ襪ぼろの浮島ぼろに刺さつて居た。陀堀多はその柄を取上げた。あたり四方へ力一ぱい撒いた。

風がその匂いを送つて危うく榕樹の林へ入りかけようとする姫の嗅覚に届いた、姫は袖で顔を覆つた。

姫に一つの強い感銘を与えたということとで陀堀多はほっと満足

した。しかし、あの美しいものを不快がらしたと思うといじらしくてならなくなった。

陀堀多は黍の中で泣いた。

### 殺商主祀天諭

一隊商が曠野こうやで颯風さつふうに遇った時、野神よがみに供まじうる人身御供ひとみごころとして案内人を殺した。案内人を失った隊商等の運命は如何。×××で雇い入れた案内者は不思議な男だった。

「ほんとうの案内者は殺されてから案内する」

こんなことをいった。みんなは大して気にも留めなかった。一

つはこの案内者の見かけが平凡でそこらにぎらにある雑種のアラビア人とちつとも違わないし、その上相当に狡くもあつたのでただ出鱈目でたらめをいう言葉のなかに聞き流した。

自分の言葉に取り合われぬとき案内者はその平凡な顔の上にかすかな怒りを見せた。

隊商は出発した。沙漠は無敵らくだだつた。駱駝の脚の下にむなしく砂が踏まれていると思うような日が幾日も続いた。太陽だけが日に一つずつ空に燃えて滓かすになつた。

この広漠たる沙漠のなかを案内者は杖を振り先頭に立つて道を進めた。自信のある足取で行路を指揮する権威ある態度の彼は立派な案内者だつた。

砂丘の蔭に石で蓋ふたのしてある隠し水の在所も迷うことなく探し宛あてた。太陽が中天に一休みして暑さと砂ほこりにみんなが倦うみ疲れる頃を見はからい彼は唄をうたった。

いつか一度は

さかなになつて

水のお城に水の酒

あの子と二人で水の蚊帳かや

ささやれ

涼しい

涼しい

するとみんなも声を揃えて、涼しい、涼しいと合せるのだった。

そして唄う面白さを引出して呉れた彼に感謝の拍手をみんなが送る。と、彼は一応うれしそうな顔はするがその後でぽかんとひとり言のようにまたいうのだった。

「ほんとうの案内者は殺されてから案内する」

みんなは追々おいおい彼のこの言葉に何か神秘めくもののあるのに気を付け出した。

×××を出発してから十何日目かの午後だった。行手の蒼空あおぞらの裾が一点つねられて手垢てあかの痕あとがついたかと思う間もなくたちまちそれが拡がって、何百里の幅は黄黒い闇になってその中に数え切れぬほどの竜巻かかきが銀色の髭を振り廻した。頬に痛い熱砂。駱駝は意気地なく屈かがんで仕舞った。

さあ、誰か一人殺さねばならない。隊商の中のみんなが一度にそう思った。そして無気味な顔を見合せた。沙漠のなかで大風に会うのは天神の怒に触れたものとして隊商のうちの一人を犠牲にして災難を免れるよう<sup>いの</sup>禱らねばならない。このことは誰も知って居た。

隊商はみな同族だった。お互いがお互いの妻や子を見知って居るような間柄だった。人情として誰一人にも手を加えられなかった。犠牲にするのは異邦人の案内者より他になかった。みんなは案内者を殺した。

大風は去った。案内者の死骸は鼻の穴も口も砂で一ぱい詰って朽木のように半分地に埋って居た。

いのちを助かつて隊商のみんなは今更砂漠の中で案内者を殺して仕舞った失敗に気がついた。

「どうしよう」

みんなが口に出して言った。

当惑。迷いに迷ってみんなが渴<sup>かわ</sup>き死にに死ぬのは眼に見えるようだった。

困るといふ感情が強く胸から身体の八方を冷酷に焼け爛らして行くとそのあとへ絶望という空虚が時間も空間も浸み込めない緻密の限りの質を持ち込んでそこを埋める。だが人々は、そのあまりに超人的な冷度に長く堪えては居られない。

思わずそこから弾ね起きる。みんなは云った。



「これからは、われわれみんなが案内者だ。行けるところまで行く」

途端にみんなの胸に浮んだ言葉はあの案内者の口から出たものだ。だつた。

——ほんとうの案内者は殺されてから案内する——

しかし、本当に死んでその証あかしを見せたこの言葉は殊にこの案内者だけの言葉であつたのか、それとも昔から一般案内者の間に伝わって居た一般案内者のうちの或者が或場合に遭遇する運命を予約したものかみんなには判らなかつた。彼等はそこから出かけようとして一斉に砂だらけな案内者の平凡な顔を見返した。

## 唵米決口喻

妻の家の米を盗んで口へ入れた男の話。

こういう気持ちを人にいつて判るだろうかどうだろうか。また  
はこういう気持ちは自分だけ變質的に持つていて到底、他人には  
理解されずに終る果敢はかないもの一つなのか。作太郎は医者の前  
で涙をぼろぼろ零こぼした。医者は作太郎の膨れた頬に丁寧ていねいに麻痺劑  
を注射した。手術を取捲いた花嫁を前に家族一同が心配そうな顔  
を並べた。

結婚後七日目に作太郎は新妻を連れて妻の実家を訪問したのだ  
った。媒酌結婚ではあったが彼はその妻もその実家をも愛して居

た。

程よい富、程よい名望、三棟の土蔵へ通う屋根廊下には旧家らしい薄闇が漂っていた。棧窓からさし込む陽にあめいろ飴色の油虫が二三びき光った。

「気味がお悪くは無くて。あたし陰気でこの家好きになれませんでしたわ」

花嫁の卷子は取做とりなし顔にこういった。

自分が貰った新鮮で健康でカルシウムの匂いのする乙女おとめ、それを生むために何代かの人が儉約、常識、忍耐、そういうような胎盤を用意したのだ。そう思うと作太郎はこの実家の一々のものに感謝のところが湧いた。

「いい家だよ。がっちりしたおっかさんのような家だよ」

立止まると<sup>ふき</sup>露を混ぜた味噌汁の匂いと家畜の寝藁<sup>ねわら</sup>の匂いとしずかに嗅ぎ分けられた。作太郎は廊下や柱や壁をしみじみとした愛感で撫で乍ら歩いた。

廊下が尽きて土蔵の戸前へ移るところは菜がこぼれて石畳が露出して居た。そこから裏庭へ出て逞しい駝鳥のような鶏を作太郎に見せようという巻子の趣向なのだが下駄が一つしか置いて無かった。巻子はそれを穿くと、もう一つを取りに出た。

正午前の田舎の日光は廊下の左右の戸口からさし込んで眩<sup>まぶ</sup>しかった。柱に凭<sup>もた</sup>せて洗った米が箕<sup>み</sup>に一ぱい水を切る為に置いてあった。粒米はもう陽に膨れてかすかな虹の湯気を立てて居た。

動物が穀物に対する本能。それで作太郎は思わず手を出したのだが意識的には一つ卷子の実家のものを無断で貰つてやれ、こういう気持ちに動かされて五本の指先をザクリと米に突込んでその一握りを口に頬張つたのだ。この無断は、咄嗟とつさな振舞いがいかに作太郎をして卷子の実家に対する親愛の念を満足せしめたか、彼は頬のふくれ返つた微笑の顔を母家の方へ向けた。途端に卷子が歸つて来た。提さげた庭下駄を下に並べる間もなく作太郎の顔を見て彼女は驚いていった。

「あなた。どうかなすつたの、頬が——」

彼女はいままで云いそびれて居たあなたという言葉を思わず使つた。

作太郎は赫あかくなつてそれから土気色になつた。口に一ぱい詰めた生米は程よく乾いていたので少々の唾液では嚙のみ下せなかつた。まして新妻の前で吐き出すことはどうしても出来なかつた。さもしい真似と思われそうなので。

夫の異常を見て卷子が叫声を立てたので一家中の騒ぎとなり作太郎はいよいよバツを悪くし作太郎に苦悶の表情が現われるほど一家の心配を増しとうとう外科医まで招んで来て仕舞つた。

作太郎の頬は麻痺剤の利目が現れてだんだん無感覚になつて来た。もうじきそこに刀が突立てられるだろう。そしてその皮膚の切口から喜劇的な粒米がぼろぼろ現れたら世界一恥かしいことだ。「そのときおれはどうしたら宜いんだらう」

作太郎は眼を瞑って人はどうしてこういうとき死なないのだろうと悔いながら何の救たすけも見出されない今の自分を世の中のたった一人の孤独と感じた。

### 食半餅喩

或人が食に飢え七枚の煎餅せんべいを喰べた。だが七枚目を半分喰べた時満腹したので彼は言った、「今の半分の為に私の腹はくちくちくなつたのだ、だから先の六枚は喰べなくてもよかつたのに」

明るい早春のサンルームで愛の忍堪力の試験。

イエツ教授の娘のマーガレットはこういう実験のプランを可愛  
ゆいとき色の小脳の襞ひだから揉もみ出して支度したくにかかった。——招待  
状、英国風の朝飯、その朝すこしの風も欲しい。

恋人の三木本は約束の時間にやって来た。オースチンリードで  
出来合いをすこし直さしたモーニングの突立った肩が黄いろい金  
鎖草の花房に臆おじた挨拶をしながら庭の門に入る。東洋風の鞣なめし  
革がわの皮膚、鞣革の手の皮膚。その手がそこで急いで本ものの鞣  
皮の外套を脱ぐ。

苦学の泥の跳ねあとを棘の舌ですっかり嘗めてしまった猫のよ  
うな青年紳士は蜘蛛くもの糸の研究者で内地レントゲン器械製造会社  
との密約者。



眩しいような白と萌黄もえぎの午前服で男を圧迫しながらマーガレットは爪磨きをして二日目の彫刻的な指先で甘える。

「そのトーストを一枚、苺いちじくのジャムを塗ってね」

男の忠実に働く手とカフスが六つばかりの銀器に映る。

庭の桜と梨の花が息を詰めて覗く。蒼空を下から持上げようと薔薇色の雲が地平から頭を押し出して見たが重くて駄目。

「こんどは、マルマレードを塗って一枚ね」

承知した男の忠実さとエリザベス朝式の銀器に手とカフスを映すことは前とちつとも変らない。どこかでフォルクダンスのレコードがこどもの靴先に挑みかける間拍子の弾み切ったのが聞える。

男は両りょうびん鬢びんの肉と耳を少し動かして聞く。

もう一枚、同じくマルマレードをつけて、もう一枚、もう一枚、もう一枚——マーガレットは男に取って貰って六枚まで喰べた。

だが七枚目は

「半分」

と云った。

このとき思わず令嬢の顔を見た三木本の眉の根に面倒と怒り、で挟み上げられた肉の隆起を認めた。だがそれは極めてかすかなものですぐ消えた。

三木本の帰ったあと遅く出た風の送る水仙草の匂いを嗅ぎながら広いサンルームでマーガレットは安楽椅子にくたりとした。彼女は満腹したのが何となくおかしくなり、独りでくくと笑った。

それから考えた。

「三木本が悦よろこんで自分に世話をやく程度はトーストパンにすると六枚までである。七枚目には彼は面倒を感じる。興味ある心理実験。その試験材料をわたしはおなかに喰べた」

彼女はまたおかしくなった。

「それにしても満腹して少しおなかが切ない。あのパンの前の六枚を喰べずに一番あとの七枚目の半分だけで三木本の愛の分量の実験の効果を挙げる方法はなかったものか」

蒼空に乱れ始めた白雲を眺めながら彼女の頭脳の若さはこんな無理をしきりに考えた。

## 小兒得大龜喻

この辺で亀は珍らしかった。こどもはそれを捉えた。用心して棒切で押えて縄で縛った。

こどもははじめて見るこの爬虫類を憎んだ、石の箱のなかに首も手足もしまつて思い通りにならない。ひっくり返せばそのままひっくり返つて居る。こどものリズムとテムポが合わないもどかしい退屈な動物だ。

それにこどもはこの動物を危険な動物とも見た。なにしろ手足に爪が生えている。口には歯もある。危害を隠しているこの醜いものを殺して英雄になり度い気持ちがかどもに強く湧いた。こど

もは勇氣を揮<sup>ふる</sup>つて石を二つ三つ亀の上へ投げて見た。亀は死ななかつた。

通りがかりの人があつた。

「それは、水のなかへ入れるが宜い。一番早く死ぬ」

こどもにこう教えた。

（おとなというものは真赤な嘘をこどもに信じさせるときにくらか自分もその気になるものだ。とうとう本当にその気になって仕舞うこともある。）

こどもは亀を池の中へ入れた。背中に模様のある石は一たん水の中に沈んでそれから浮いて水草の間に手足を働かした。

「やあ、苦しんでやがる」

惨虐な少年の性慾は異様な満足を感じた。

おとなの嘘から少年の中に綻ほころびた性慾の赤い蕾は、やがてお町、鏡子、おふゆ、というような女に苦勞をさす種となった。

# 青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成6）年2月24日第1刷発行

底本の親本：「鶴は病みき」信正社

1936（昭和11）年10月20日発行

初出：「三田文学」

1934（昭和9）年11月号

入力：門田裕志

校正：オサムラヒロ

2008年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 百喩経

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>